



巻き貝みたい!!

20世紀 日本建築の「代表選手」

1964年東京五輪の会場として建設

巻き貝のようなダイナミックな曲線屋根が特徴の国立代代木競技場の体育館（東京都渋谷区）。戦後の日本建築の中でも「傑作」といわれていますが、どんな建物なのでしょう？ 世界遺産への登録を目指す団体が5月に開いた、ジュニア見学ツアー取材しました。（小貫友里）

世界遺産を目指す団体が見学ツアー

国立代代木競技場第一体育館（右）と第二体育館
＝2016年9月、朝日新聞社ヘリから ©朝日新聞社



第一体育館



第二体育館

特に表記のないものはどれも5月20日、東京都渋谷区



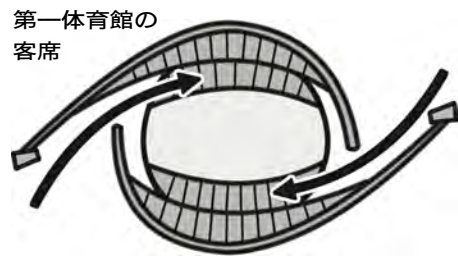
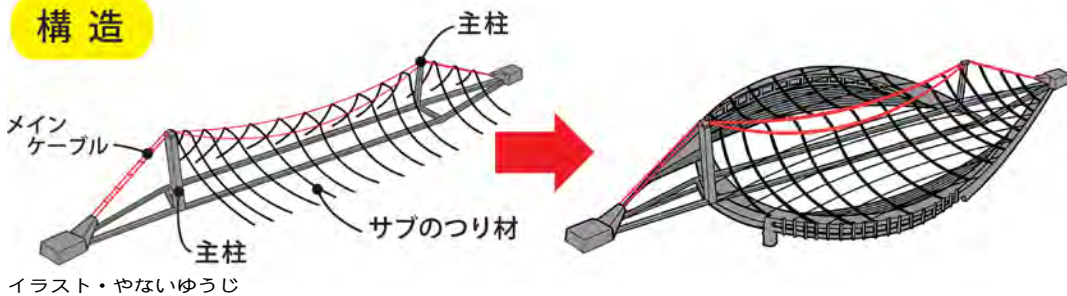
第一体育館の室内 ©鳥村舞一

フジテレビ社屋や都庁でも有名
丹下健三さん設計

国立代代木競技場の体育館
東京渋谷

曲線映える 前代未聞の巨大つり屋根

構造



第一体育館の構造を、プラスチックのくさりを使って再現しながら学ぶ参加者たち

約130本離れた、高さ約40mの巨大な柱の間に2本のケーブルを張りまします。ケーブルは直径33mm、重さ250kg。そこから左右につり材を伸ばし、屋根をかけた。世界でも前例がない建設方法で、3次元の曲面が多数あり

代々木競技場は、1964年東京五輪の水泳、バスケットボールの競技会場としてつくられました。2021年の東京五輪・パラリンピックでも会場に使われています。設計は丹下健三さん（1913～2005）。戦後日本を代表する建築家で、フジテレビ本社ビルや東京都庁なども手掛けています。第一体育館は、アリーナ面積が4千平方メートル。小学校体育館で3、4個分もあります。席数は最大で1万2934席。アリーナから席に座る観客全員の顔が見えるようになっています。丹下さんは、観客とアリーナに「一体感」がある空間を目指しました。そのため、一体感を妨げる柱を極力減らして建物をつくらうとし、導き出したのが、支柱に張ったケーブルの上に巨大な屋根を乗せる「つり屋根構造」です。

アリーナから全観客の顔が見える「一体感」生む空間

とても難しい工事でした。一方でこの建物には、ほかの建物に先駆け、風や地震の揺れを吸収して建物が壊れるのを防ぐ仕組みも採用されています。11年の東日本大震災でも、建物に深刻な被害はありませんでした。

客席は上から見ると、アリーナを中心に、半円を少しずらした形で配置されています。1万人超の入退場や緊急時の避難を考え、出入り口の場所が明確で、スムーズに移動できるようにしています。

第二体育館は、アリーナ面積が1300平方メートルで、席数は最大4002席。第一体育館と同様の構造で、こちらは1本の柱から屋根をつっています。

デザインと建築技術のいずれもが秀でて価値が高く、21年に、建物として完成から最も「若い」国の重要文化財になりました。最近では、世界遺産の登録を目指す動きもあります。

この場所は太平洋戦争までは軍隊の施設があり、戦後米軍に接収され、五輪に向けて返還されました。その後は、スポーツやコンサートなど文化イベントの会場として使われています。代々木競技場は、戦争から平和へ変わる時代の象徴でもありました。

ツアーで解説をした、千葉大学准教授の豊川斎藤さんは、「デザインが優れているだけでなく、20世紀の日本の歩みを反映している貴重な場所です。子どもたちが、平和で楽しく過ごせる世界を実現していくシンボルとして、ここを残していきたい」と話します。

見学会に参加した、前澤美乃さん（埼玉・高1）は、「約60年前でもこんな技術があったのかとおどろきました。建築の魅力を知ることができました」と話します。